

ごみの少なさ 全国1位の実績を海外へ

10.15
2019
(令和元年)



本市は、^{ジャイカ}JICA(独立行政法人国際協力機構)の草の根技術協力事業の一環として、ミクロネシア連邦チューク州でのごみ問題改善に取り組んでいます。こうした取り組みは多摩地域では初めてであり、1人1日あたりのごみ総排出量の少なさ全国1位(人口50万人以上の都市、環境省発表平成29年度実績[最新実績])の取り組みを活かし、海洋プラスチック問題の一因となるレジ袋の使用を減らすための啓発活動、ごみ収集業務の改善支援や清掃活動等を行っています。また、本事業に関して、市内小・中学校等から講演依頼を受けるなど、国際理解教育の推進にもつながっています。

ミクロネシア連邦チューク州のごみ問題改善を支援

ミクロネシア連邦とは

太平洋の赤道の北側に沿って点在する607の小さな島々からなる国で、4つの州から構成され、約11万人の人々が暮らしています。そのうちチューク州は、世界でも有数のダイビングの名所であり、美しい海と手つかずの自然が残っています。歴史的にも日本とのつながりが深く、現地では今でも「デンキ」や「ガッコウ」など、たくさんの日本語が話されています。



事業開始までの歩み

平成23年6月から2年間、本市職員が青年海外協力隊員として、チューク州のごみ問題改善のために現地へ赴任したことに合わせ、本市で使用していた収集車両を外務省の制度を利用して寄贈するなど、ごみ収集システムの構築に貢献しました。しかし、現地住民のごみ処理知識の不足、ごみ収集車両整備の未実施等の課題があり、引き続き、改善が求められていました。

事業概要

- 事業期間は平成29年8月から令和2年2月まで
- 全6回の現地派遣と本市に招く国内研修を1回実施
- 「現地住民への2R普及啓発活動」「ごみの収集・車両整備業務の改善」「生ごみ処理槽の設置」を中心に活動
- 学園都市である本市の特長を活かした市内大学(公募により選定)との協働事業
- 事業経費はJICAにより負担

現地住民への2R普及啓発活動

ごみの焼却施設やリサイクル施設がなく、埋立ちはほぼ満杯であるため、現地住民へ2R(リデュース・リユース)を普及させ、ごみを減らす必要があります。



▲店頭での2R普及調査

▲配布したマイバッグを持参

現地状況



▲海と隣り合わせの埋立場

買い物時のレジ袋の使用を削減するため、現地NGOと議論を重ね、現地風土に合ったオリジナルマイバッグを作成し、住民へ配布。協力大学の創価大学とともに、スーパーマーケットで「NOレジ袋デー」イベントを実施した結果、レジ袋辞退率を向上させることが出来ました。また、さまざまな地域で開催した出前講座等により、現地の方が主体となって活動を展開するまでに意識の向上が図れました。

さらに、現地では2020年1月からレジ袋の使用等を禁止する法律が施行予定のほか、リサイクルセンターの設置も計画されていることから、これらの円滑な実施に向けて現地関係機関を支援しました。

ごみの収集・車両整備業務の改善

収集車両は潮風や砂ぼこり、悪路の影響に加え、知識不足で整備・点検が行われていないため、頻繁に故障しており、ごみ収集に支障をきたしていました。



▲車両整備は欠かせない作業

▲収集時の安全作業研修

現地状況



▲故障した収集車両

故障していた収集車両を修理し、壊れた原因や整備・点検の方法を伝えました。また、効率的な収集や安全作業に向けた研修を実施し、業務の改善を図るとともに、ごみ減量に関する住民への啓発方法を伝えました。

さらに、これまで伝えてきた内容を今後も継続してもらえよう、業務マニュアルを作成しました。

生ごみ処理槽の設置

道路の未整備でごみを収集できず、庭や道路沿い等にごみが放置される地域があり、衛生面に問題があります。この地域から排出されるごみを調査した結果、有機性ごみ(生ごみや草木など)が約50%を占めていました。



▲生ごみ処理槽は子どもたちがごみ問題を学ぶきっかけにも

適切なごみ処理を促すため、土中の微生物により有機性ごみを分解する生ごみ処理槽を2か所に設置し、近隣住民へ使用方法や目的を伝えました。その後の調査では、排出される有機性ごみの割合が約20%に減少しました。

また、他地域でも普及するように、現地でも入手可能な資材で生ごみ処理槽の代替品が作れるよう提案しました。

現地状況



▲捨てられた有機性ごみ

環境美化・海洋プラスチック問題への取り組み

現地では海岸沿いにもごみが散乱しています。特にプラスチックごみは、長い時間をかけて「マイクロプラスチック(5mm以下のプラスチック)」となるため、海洋生物への悪影響の事例が報告されており、世界的な問題になっています。



▲海岸沿いに散乱するごみ



▲海洋生物への影響を伝える寸劇

▲環境美化に向け清掃活動

不適切なごみ処理は、海洋プラスチック問題につながることを出前講座等で強く訴えました。住民からは「レジ袋を海に捨てるのが、魚や海に影響を与えるとは知らなかった」「これからはごみをポイ捨てしないでごみ収集を利用する」などの声が寄せられました。

また、現地NGOとともに開催した清掃活動では、多くの参加者と一緒に散乱しているごみを片付けました。参加者の中には子どもたちも多く見られ、本事業終了後も清掃活動を継続する意欲が感じられました。



▲マイバッグの使用状況を調査

本市に招いて研修を実施

本市の市民協働による取り組みを学び、今後の現地活動に活かしていただくため、本年6月に約2週間、現地関係者6名を本市に招いて研修を行いました。

研修では、次世代を担う子どもたちに授業として行っている出前講座の見学や買い物時のマイバッグ使用状況の調査、子どもたちや学生との国際交流など、さまざまな取り組みを体験。また、環境美化に関する意識向上に向け、ごみ拾いのボランティア活動にも参加していただきました。



チューク州
ウェノ市役所
アトソン・
ナカヤマ氏

市民協働や子どもたちへの教育の重要性など、多くのことを学ぶことができ、とても感謝しています。特に印象に残っているのは「世界的な視野をもち、できることから取り組む」という考え方です。学んだことをチューク州で実践し続けていけるように皆で団結していきます。



▲小学校での出前講座を見学



チューク州
女性評議会
クリスティン・
ロバート氏

研修を通して八王子市が大好きになりました。学んだ全てのことを現地の人々に共有し、実践できるように努力していきます。八王子市とチューク州の友好関係を今後も続けていけたら、チューク州の環境美化は進むのですばらしいと思います。



▲講演ではクイズも交えて

市民の声

新聞やテレビ、市ホームページ等を通じて、本事業を知った市内・市外の方、教育関係者から「市民として誇りに思う」「授業の教材としたい」などの声が寄せられました。また、市内の小・中学校と大学から講演依頼を受け、本事業の説明をするとともに海洋プラスチック問題等を伝え、環境問題やごみ問題について「自分ができること」を考える機会にさせていただいています。

マイクロプラスチックを魚や亀が食べてしまうことは知りませんでした。今後はマイバッグを使おうと思います。
(市内小学校4年生)

あたりまえのようにごみが処分されていることをありがたいと感じました。ごみを減らすためにできることをやっていきたいです。
(市内中学校1年生)



▲環境・ごみ問題への関わり方を考える機会に

発行 資源循環部ごみ減量対策課 ☎620・7256 ☎626・4506



あなたのみちを、
あるけるまち。
八王子